

令和6年2月1日（毎月1回1日）発行

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

2024

No. 903

2 February

みちしるべ

MICHISHIRUBE



## Contents

人の心／遠藤祥基.....	3
巨人の話／濱松伸作.....	4
著名人と聖書 第8回 アーネスト・ゴードン／古賀敬太.....	8
見る、聞く、体感する／太田悠人.....	12



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

# 人の心

遠藤祥基



「心」の語源は凝々（ころころ）から来ているそうで、実際人間の心ほどコロコロと転がりやすいものではありません。重力によって球体が下に転がるように、人間の心も下に転がるようです。

人は成長と共に知性は向上しますが、心においては下り坂の傾向にあるのではないのでしょうか。社会人よりも学生の方が正直で、中学生よりも小学生の方が率直です。子供の頃に罪悪感を感じたことも、成人した時には仕方がないと考えるようになり、更には当然だと考えるようになります。それが人間の心の本質です。

主イエスは人の心について次のように説明しています。

「人から出てくるもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出

て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」（マルコの福音書7章20〜23節）

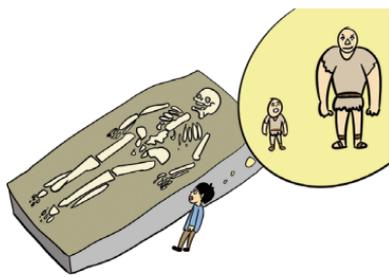
善悪を正しくさばかれる神様は、このような事柄を罪に定めます。人間に善悪を判断する良心が備わっているのは、人にとって必要なものだと思われが与えたからです。それは人が神様に対して責任を持つていることの証拠です。

私たちは死後、神様の前に出て地上での行いについて弁明しなければなりません、このような心の状態で、どうして天国に行けるのでしょうか。私たちが神様の前に自分の正しさによって義と認められることはないので。だからこそ、神様は私たちの救いのために主イエス・キリストを遣わしてくださいのです。

「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いあがなを通して、価なしに義と認められるからです。」（ローマ人への手紙3章23、24節）

# 巨人の話

濱松伸作



数年前の話になりますが、あるテレビ番組を見ていました。何という番組であったかは正確には覚えていませんが、その番組で、世界の不思議な事、謎めいた出来事などが紹介されていました。

その中で私の興味を強く惹いたものがありました

た。それは外国の遺跡の発掘で巨人の骨が見つかったというものです。その骨というのは、巨人の手の指や胴体、足の骨の一部などというものではなく、頭のとっぺんから爪先にいたるまでの全身の骨がきれいな状態、つまり埋葬された状態で発掘されたというのです。調査の結果、その巨人の骨は複製ではなく、また、画像を組み合わせて、それらしく作り上げたものなどではないことが証明されたそうです。フエイクニュースに踊らされることもあるので、はじめは映像をただ驚き呆れて見るだけでしたが、その後、興味をそそられて巨人の事について自分でも色々調べてみました。すると、類似した多くの事例があることが分かりました。

1964年にエクアドル南部で発見された7.6メートルの巨人の全身の骨。120センチを超える巨人の足跡が刻まれた南アフリカの巨石。1986年にメキシコで発見された推定3.5メートルの巨人

の頭蓋骨。1988年にエジプトで発見された長さ1メートルを超える巨人の指。メソポタミアの遺跡から出土した推定身長5メートルの巨人の大腿骨。

これらはほんの一例ですが、全世界千か所以上で巨人族の痕跡が発見されているようで、遺跡周辺の調査により、巨人が集団で生活していた可能性も考えられるそうです。

このような巨人の骨の発見は、世紀の大発見と言っても過言ではないほどの歴史的発掘の一つです。(もちろん、そのすべてが本物であるかは分かりませんが。)それなのに、なぜ私たちはこの大ニュースを報道番組で見たり、インターネットのトップニュースで知ったりしないのでしょうか。たとえ取り上げられたとしても、学会誌ではなく、オカルト雑誌のようなものばかりです。そのような発見を報じる新聞記事も過去にはあったようですが、その骨は皆、なぜか消失したり、行方不明になったりするそうです。(Wikipedia「巨人」より)

実は、その発見に対して、当事国が発掘されたも

のをすぐに回収し、学会や研究機関がこれらの情報をすべて隠蔽しているという噂が存在するのです。—真偽の程は分かりませんが、20世紀初頭、アメリカのスミソニアン博物館が数万点に及ぶ巨人の骨をすべて処分したという話もあります。

もちろんこれらに対しては、フエイクニュースや陰謀論だとする意見が大半を占めるのですが、巨人に関する発見の話は、虚実を含め、なかなか後を絶たず、結局のところ、巨人の存在を完全に否定しきるに至ってはいません。

しかし、もし当時のこれらの隠蔽が仮に事実だとしたら、そのようなことをする理由は何だったのでしようか。おそらく考えられるのは、巨人の骨の存在が、従来の進化論に反していたから、という背景によるものです。進化論は20世紀以降、その分野において、最も有力な理論としてされてきましたが、巨人の骨が複数見つかるということは、連続した突然変異でもない限り、進化論上は起こりえないと考えられたわけです。ですからそのような発見は、当時の学術レベルにおいては絶対に受け入れられない

出来事だったに違いありません。(ただ現在では自然淘汰によって巨人が存在しなくなったと説明できるとされているようです。)

もし巨人の存在によって進化論が否定されるといふことになれば、それが正しいことと認められつつあった学界の受けるダメージや損失は、底知れないものとなったはずです。過去の自然科学の歴史をふりかえると、真実を追求することよりも、これまで築き上げてきた定説を守ろうとする動きは、少なからず起こってきたことです。そうした学界の地位を守るための隠蔽が、かつて本当に行われたとするならば、進化論学界の闇がいかに深いかを物語っている気がします。

人は目に見えるものだけがすべてであり、目に見えないもの、見たことがないものについては想像で物事を判断するか、存在しないと信じる傾向にあります。しかし、ちっぽけな人間がその頭で考え、想像するものが、この世に存在するすべてのものであるとどうして言い切ることができるでしょうか。



ここで聖書を見てみますと「ネフィリムが地にいた。」(創世記6章4節)、「レファイム人」(創世記14章5節)とあり、ネフィリム人もレファイム人も巨人であったとされています。他にも民数記や申命記にも同じような記述が見られ、背の高い民族がいたことが記されています。それらの箇所を読んで

みると、「実は巨人がいたのです」、などという驚きに満ちた書かれ方はされておらず、ごく自然に、当然の事として巨人の存在について語っているということに気づきます。また一般的にもよく知られている、少年ダビデに石によって倒されたゴリヤテも、3メートル近くある大男でした（サムエル記第一・17章4節）。

そもそも聖書は、神話などが寄せ集められている書物と考えている方も多いと思いますが、実際によく読んでみると、事実について客観的に的確に伝えている書物だということが分かってきます。

大切な事は、聖書が神様の靈感によって書かれた真実の書物であると受け止めることなのです。その聖書には神が天地万物を創造したことが書かれてあり、また旧約聖書には、かつて巨人がかつて存在していたことも記されています。

神様の存在を認めないこと、聖書が真実ではない

と思うこと、それらは人間の罪であるとして聖書は教えています。進化論は、神様がそれぞれの種に従って生物を造られたということを否定するものであり、それらを受け入れることも、神様から見れば罪だと言えるでしょう。私たち人間はみな罪人であり、自分自身では罪をどうすることもできません。

しかし、神様は、今から2千年前、ひとり子であるイエス様を遣わしてくださいました。イエス様は、そんな人間の罪のすべてをその身に負ってくださって、私たちの代わりに十字架の上で神様からのさばきを受けてくださったのです。私たちはそのことを信じ受け入れるだけで、罪が赦され、救われて、永遠のいのちを持つことができます。実は、そのことが数多くのが記されている聖書の中で、最も重要なテーマなのです。（巨人の有無よりも）  
ぜひ、聖書が真実を伝える書物であることを知って、その語っていることを素直に受け入れられますよう、心よりお勧めいたします。

# 著名人と聖書（第8回）

古賀敬太

アーネスト・ゴードン（1916—2002）

クワイ河收容所における神の働き

戦場にかける橋

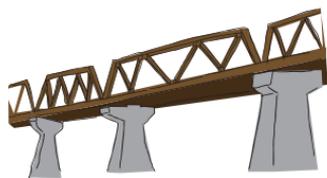
「戦場にかける橋」という映画をご存じでしょうか。英語の題名は、The Bridge on The River Kwai（1957年）で、タイとビルマの国境に在るクワイ河に橋を架ける日本軍のイギリス人俘虜（捕虜）の「極限状況」を映画化したものです。

この映画とは異なりますが、アーネスト・ゴードンという人が、同じ俘虜の極限状況を『クワイ河收容所』という小説の中で描きました。彼は、実際にクワイ河に橋を建設する強制労働に携わった人物

で、クワイ河收容所で起こった驚くべき奇跡を証言しています。本書は、タイやビルマにおいて日本軍の俘虜となった人々が、イエス・キリストと出会うことによって、生きる意味を見出し、死や絶望、そして利己主義を克服し、人間の尊厳を回復していった感動の書です。

クワイ河收容所での奇跡

俘虜たちは俘虜收容所において強制労働、チフス、コレラ、マラリヤといった感染症、拷問、殴打、飢



餓に苦しめられ、希望を失い、虚脱した無気力、無関心な人間に落ちていきました。ゴードンは、収容所の俘虜たちの置かれた絶望的な状況について以下のように書き記しています。

「死ぬのは容易であつた。抱いていた願望が裏切られると、生きていくことが重荷となつた。そしてそれが重荷になつた時、生きることを拒否するのは容易だ。生きることがもたらす苦痛を、死によって避けるのはたやすいことであつた。―極限状況の中で生きるよりも死ぬことのほうがはるかにやさしいからだ。そこで、人々は、『私自身の存在の意味はまたくくない。人生にはただ虚無のみが存在する。重要なものは何もない。そこで、私は、死ぬまで生きているにすぎない』というようになる。」

### 収容所における奇跡

こうした虚無と死が支配している「クワイ河収容所」に変化が生まれるきっかけとなつたのが、二人の俘虜ダステイ・ミラーとデインティ・ムーアの存

在でした。二人は、心から神を信じていて、ゴードンを初め他の俘虜のために献身的に尽くします。そして収容所内に、死から生への方向転換が始まり、自分のことしか考えられなかつた俘虜たちが、二人を通して神の存在と愛を知り、その神の愛が原動力となつて今度は俘虜相互の自己犠牲の愛へと発展するので。ゴードンは、この収容所に生まれた新しい変化について次のように述べています。

「死は、むろんまだつきまとつていた。これ以上確実なことはない。しかし、徐々に死の破壊的な力から自由になりつつあつた。死の手は握つたら離さない力を持つ。―自己中心、憎しみ、妬み、欲張りなどが、みな人間らしい生き方を破壊していった。ところが、その反生命的な力と違つて、今は愛、自己犠牲、思いやり、創造的な信仰が、人間らしい生命の根本をなしている要素である、と知らされるようになってきた。ただ単に生存していることから、意味のある生を生きることへの変化が、その根本要素によつてもたらされるのである。」

収容所内で見られるような自己犠牲の愛は、実は

神が一人一人を愛されたという源泉から生み出されたものでした。ゴードンは、「クワイ河の死の収容所の中に神が生きて働いておられるのを、この身に感じていた。」と書き記しています。

### キリストの十字架の意味

苦難の中で、ゴードンたちは、イエス・キリストの十字架の意味を理解するようになります。それは、イエスが人間の罪を背負って身代わりとして十字架にかけられ死んだことよって人間に罪の赦しの道が開かれたこと、またイエスが墓からよみがって生きておられ、ここクワイ河収容所においても彼らの真ん中におられるという確信でした。ゴードンは、「私たちは十字架を見上げ、十字架が与える知識、神がわたしたちの真ん中におられるという知識から力を得ていた」と述べています。

### 教会の誕生

神が共におられるという信仰に励まされたゴートン初め俘虜たちは、死への恐れを克服し、生きていくことに希望を持つようになります。そして、死の収容所が、神を賛美する喜びと希望の共同体に変えられていきます。ゴードンは、この教会がクワイ河収容所の俘虜にもたらした甚大な影響について次のように述べています。

「この教会は、すなわち神の愛の働きかけに対する喜びの応答である。その応答として存在する教会である。その教会は、世俗世界からその外側へ呼び出されて、しかも世俗世界の中であって生きるよう存在する教会である。―キリストの愛がある所ならどこにでも存在するという教会が霊の教会である。―私たちの霊の教会であった。これは、たとえるならば、私たちの共同社会の心臓であった。そしてしっかりと脈打っている心臓であった。この教会が、俘虜収容所に対して生命を与え、収容所と単なる人の群衆、恐怖におののく個人の群れを大きく変革させていた中心なのである。生存競争を生きる自己優

先の人間の集まり、怯える結果無気力になっていた人間の集まりを、一つの共同体に変えていた力の中心であった。」

### 解放後のゴードンの歩み

連合国の勝利によって俘虜の立場から解放されたゴードンは彼の生まれ故郷スコットランドに帰ります。彼は、1955年から1981年までの26年間プリンストン大学教会に属し、大学生たちに、「クワイ河收容所」での経験を語り、暗闇の中に輝く光であるイエス・キリストへの信仰を語り続けました。「クワイ河收容所」で起こった奇跡が現代において再現し、人生に絶望した青年がキリストへの信仰と神の愛に生かされることを願いながら。

### 聖書のことば

「この方（イエス・キリスト）にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。光は闇の中に輝いて

いる。闇はこれに打ち勝たなかった。」

（ヨハネの福音書1章4、5節）

### 【参考文献】

アーネスト・ゴードン 『クワイ河收容所』

（斎藤和明訳、ちくま学芸文庫）



### 【お詫び】

先月号において、森永太一郎の没月と享年が間違っておりました。

（誤） 9月・93歳

（正） 1月・71歳

# 「見る、聞く、体感する」

太田 悠人



私たち人間は「五感」（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）から情報や感覚を受け取り、物事を認識しています。

そしてその五感をさらに、次の3つのタイプに分けることができるそうです。

- ① 視覚タイプ…V (visual) イメージや映像を見ると認識、理解しやすい。
- ② 聴覚タイプ…A (auditory) 言葉で説明すると認識、理解しやすい。

③ 体感覚タイプ（嗅覚、味覚、触覚）…K (Kinesthetic) 体で経験、体感すると認識、理解しやすい。

これらの3つのタイプによって、認識方法（情報処理、理解方法）が異なっており、人それぞれに得意な感覚、苦手な感覚が決まっています。これは通称「VAK理論」と呼ばれるもので、ビジネスや教育、スポーツの分野など、あらゆる場面で活用されている心理学的な考え方です。

例えば皆さんが、素晴らしい景色のところに行き、その素晴らしい景色をまわりの人に伝えたいと思つたとき、動画や写真を見せて伝えたり(①視覚)、会って話したり、または電話で話したり(②聴覚)、そこに実際に人を連れて行き、風が気持ちよく、空気が美味しいところだったということを体験してもらう(③体感)などの方法があるのではないかと思います。

人それぞれに得意な感覚があるとされていますが、この三つの中では、やはり③(体感)が一番有力なものと言えます。そしてある事柄について一つの認識方法で伝えられるよりも、二つ、または三つ全ての認識方法から伝えられた方が認識しやすいはずです。

ところでイエス様は、一般的には「十字架で死んだ人」としか伝えられていませんが、聖書では、私たちのためにイエス様が十字架にかけられ、身代わりの死を遂げてくださっただけでなく、よみがえら

れたお方であるということも伝えているのです。

イエス様が十字架で死なれたあと、復活されたイエス様は弟子たちに姿を見せられたのですが、そのときまたまた、トマスという弟子がいませんでした。そして他の弟子たちはトマスに「私たちは主を見た(ヨハネの福音書20章25節)」と伝えたのですが、彼は「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」(同)と言い張りました。

トマスは他の弟子たちから「聞くこと」(②)だけでなく、イエス様が十字架にかかってくださったときに手に打ちつけられた釘の跡を「見る」こと(①)と、その手の釘の跡に「指を入れること」(③)、また槍で突き刺された脇腹に「手を入れること」(③)をしなければ「決して信じない」と言いました。すなわち彼は、V(視覚)・A(聴覚)・K(体感)のすべてを信じる条件として要求したのです。

そしてその8日後、再び弟子たちの前にイエス様

が現れてくださいました。

イエス様は、トマスが以前に言っていた内容を知っておられたので、イエス様から先に、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」(同27節)と言われました。

トマスは、復活されたイエス様の姿を「見て」、そのことばを「聞き」、さらに手とわき腹にある傷跡に「触れる」ことができる状況となりました。つまりよみがえられたイエス様に関する、VAKのすべてが揃ったのです

トマスは、否定するものが一つもなく、イエス様が確かによみがえられたことを認め、「私の主、私の神よ。」(同28節)と、言いあらわしました。

またヨハネという弟子は、イエス様についてこのように証言しています。

「私たちが聞いたものの、自分の目で見たもの、じつと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、い



のちのことば(イエス様)について。」

(ヨハネの手紙第一・1章1節)

ヨハネは、トマスと同様に、よみがえったイエス様を実際に見て、その声を聞き、そして一緒に食事もしたのでした。(ヨハネの福音書21章参照)

そしてイエス様の復活を目撃し、体感した弟子たちは、それまでは迫害を恐れ、人目を忍んでいたのが、突如、大胆にイエス様の復活を人々に伝えるよ

うになりました。新約聖書は、そうやってイエス様の復活を目撃し、体感した人々によって書き記されたものなのです。

彼らは命がけでよみがえられたイエス様のことを、自国のイスラエルだけでなく、世界中に宣べ伝えていきました。トマスはのちにインドまで伝道に出かけ、そこで殉教したと伝えられています。

ところで、このように疑り深くて臆病者だった彼らを、何がそこまで変えたのでしょうか。―しかもわずかな期間で。それは彼らが、よみがえられたイエス様に実際にお会いした、ということ以外に考えられません。イエス様は復活後、大勢の人々の前にご自分の姿を現されたからです。500人以上の人々の前に現れたこともありました。集団幻覚を見るにしてみれば多すぎる人数です。

そして復活から40日後、イエス様は天国へと帰っていかれました。ですから現代の私たちは当時の弟子たちのように、イエス様を見ることと、体感することはできません。しかし、この方に関する生きた証言を、聖書を通して、またその聖書の語ることを

信じたクリスチャンを通して、聞くこと（②聴覚）はできるのです。

「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」（ローマ人への手紙10章）

どうか、聖書の話をお聞きになって、いろいろな面からイエス様のことを知ってください。そしてこのお方をトマスのように「私の主、私の神よ。」と言いつくわすことができる方となられますように。心からお勧めをいたします。

「これらのこと（聖書）が書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。」

（ヨハネの福音書20章31節）

みちしるべ2月号 第903号

令和6年2月1日（毎月1回1日）発行

発行所 伝道出版社  
〒183-0066 東京都府中市寿町 2-8-9  
TEL 042-366-7760  
FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部  
<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>  
印刷所 株式会社 共同印刷所

ツアラアト（現代で言うハンセン病）という病気を初めて知ったのは、集会に来て、聖書のお話を聞いた時でした。その当時はらい病と訳されておりました。ツアラアトは、神経が侵される恐ろしい病気、遺伝病ではなく人から人へと移る伝染病……。

その後、「砂の器」「いのちの初夜」「ベン・ハー」（近年では「あん」といった、ハンセン病を題材にした小説を読みました。その病気は古来より、多くの人々を、肉体的苦しみだけでなく、差別によって苦しめてきたことが分かります。またわが国において、その病気でお苦しむ人々のために尽力した、林文雄、岩下壯一という人々の名前を知りました。

しかしその病気をイエス様がいやされ、その病気によって苦しんでいた人が神様を賛美している話を聞いたり、読んだりした時、イエス様の偉大さ、信仰の素晴らしさを感じました。そこに真実の力を感じました。

聖書において、このツアラアトは、私たちの心を蝕み、良心を麻痺させる罪という病気を教えています。イエス様はツアラアトをいやされただけでなく、その罪をもいやすことのできるお方です。あなたもイエス様に会われ、罪に苦しむ人生から神様を賛美する人生へと変えられますように。

（岡崎隆司）

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。



定価1部 50円＋税  
送料63円  
振替00140・9・27336

伝道出版社

〒183・0056 東京都府中市寿町2・8・9

みちしるべ2月号 第903号

昭和43年1月10日第3種郵便物認可  
令和6年2月1日（毎月1回1日）発行